

4. 植栽管理の課題

4. 植栽管理の課題(春日大社へのヒアリングによる)

(1) 現在の植栽管理の課題

① ナンキンハゼの増殖対策

● 幼木の対策

現在行っているナンキンハゼ対策として、幼木の駆除を継続的に行っている。1年性の稚樹は引き抜き、2年性は刈取りを行っている。市民グループの協力を得て、約30名程度で行っているが、増殖スピードが速く手に負えなくなっている。

今年は、コロナ感染症等のため対策の実施が限定されており、問題が大きくなることを懸念している。

● 成木の対策

成木からナンキンハゼの種子が境内全域に散布していると考えられることから、成木の伐採が必要である。現時点では、許認可手続きや財政的な理由から進んでいない。

② ナギの増殖対策

ナギが増殖して分布域を拡げていることは認識しているが、その速度はゆっくりであるため、切迫した問題ではない。

③ スギの風害対策

スギは、近年の台風で多数の倒木や幹折れが発生している。風害対策は重要で、スギの比率を高めることは避ける必要がある。

(2) 今後の対応について

① ナンキンハゼの対策

ナンキンハゼの対策は急務であり、成木の伐採は速やかに行う必要がある。

計画対象地のナンキンハゼは、伐採の必要性が高いが、参拝者から景観的な美しさも評価されていることから、芝地中央部の水路際の大木については、暫定的に残しておくことを検討している。その他のナンキンハゼは、伐採し、根株は薬剤処置とひこばえの刈り取りで対応していく予定である。速やかに伐採の許認可が得られることを期待している。

② ナギの増殖対策

ナギは「神木」と言うよりも、春日大社の境内林に特徴的な樹木と認識している。春日大社境内整備計画に示したとおり、ナギの保存区域以外については伐採などによって除却することも選択肢である。但し、増殖速度がゆっくりであるため、当面の課題ではないと考えられる。

③ 在来種の補植

イチイガシやケヤキなどの在来種は、春日大社境内林の健全化のため補植すべき樹木である。ドングリなどはシカの餌となるため、シカの生息環境を整えるためにも重要と考えている。

5. 植栽計画

5. 植栽計画

(1) 基本的な考え方

「植栽・景観の保全には、地域の自然植生の持続を念頭においた対策が必要である。」

計画対象地の植栽・景観の特徴は、深い樹林に囲まれた広大な芝地と、若草山、御蓋山、高円山の山並への眺望にある。この植栽・景観は、少なくとも明治・大正以降、見た目の姿はほとんど変わっていない。しかし、計画対象地を含め春日大社境内の自然植生は、外来種の増殖による大きな変化がみられ、地域の自然植生の持続が危ぶまれる状況にある。このため、植栽・景観の保全のためには、地域の自然植生の持続を念頭において、次の2つの主要課題に取り組む必要がある。

主要課題1：ナンキンハゼの駆除

計画対象地を含め春日大社境内では、侵略的外来種であるナンキンハゼが急速に増殖している。ナンキンハゼの種子は、鳥の採餌によって運ばれ、散布された樹林地や草地・裸地で発芽生長する。この増殖によって、一部の樹林はナンキンハゼが優占し、草地や裸地ではナンキンハゼによる樹林化が見られる。計画対象地においても、増殖したナンキンハゼが多数見られ、一部は樹林を形成し、新たな種子供給源となっている。地域の自然植生の保全のためには、ナンキンハゼの駆除が必要である。

主要課題2：在来種の育成

春日大社境内の樹林地は、もともとは在来種で構成された樹林であったと考えられるが、シカが定住しているため、現在はシカが食べない樹種が多くを占めている。近年、シカの頭数増加に伴いこの傾向は強まり、計画対象地の外周の自然樹林では、ケヤキ、エノキ、コナラ、イヌシデなどシカが採餌する在来種の樹木は大径木ばかりで、稚樹や若木はまったく見られない。このような傾向が継続すると、将来大きく林相の変化をもたらすシカが食べないナンキンハゼ、ナギ、イヌガシなどの樹種だけで構成される樹林に遷移する可能性がある。このため、計画対象地の外周の自然樹林においては、在来種の育成が必要である。

5. 植栽計画

(2) 計画方針

芝地・樹木群ゾーンの計画方針の修正・他

計画方針：持続性に配慮して芝地と樹林による植栽・景観を保全・継承する。

- ・ 広大な芝地と外周の樹林・樹木によって構成される植栽・景観を保全・継承する。
- ・ 若草山、御蓋山、高円山への眺望景観を保存・継承する。

記念樹「飛火野のクスノキ」(3本)

市指定天然記念物
春日大社境内イチイガシ巨樹群
(巨樹33本の内の1本)

ゾーン共通

- ・ 若草山、御蓋山、高円山への眺望を保存・継承する。
- ・ 阻害されている山地への眺望を改善する。
- ・ 隣接する浅茅ヶ原からの眺望に配慮する。

参道ゾーン

参道沿いの樹林・景観を保全・継承する。

芝地・樹木群ゾーン

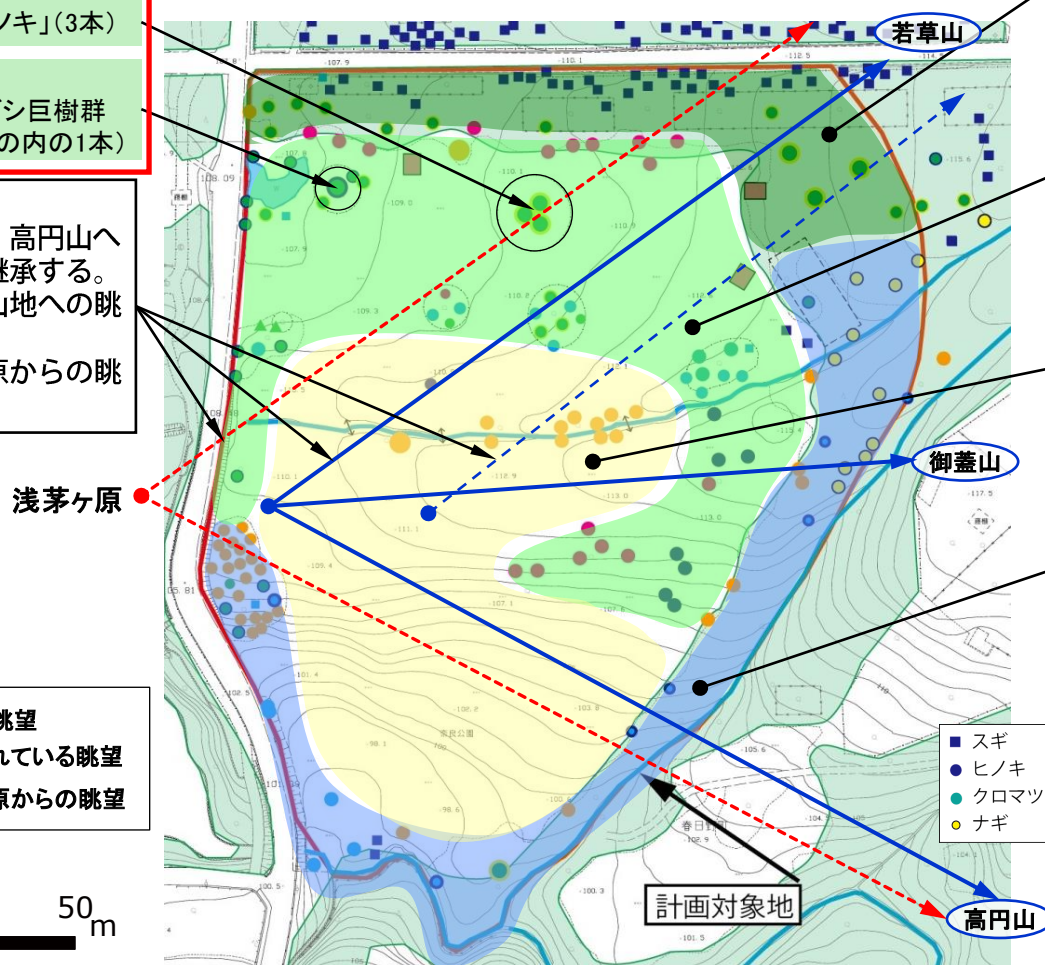
- ・ 市指定天然記念物イチイガシ巨樹を保全・継承する。
- ・ 記念樹「飛火野のクスノキ」を保全・継承する。
- ・ 芝地と点在する樹木群（ケヤキ、クスノキ、ツガ、カマツ等）を保全・継承する。

芝地ゾーン

- ・ 広大な芝地を保全・継承する。
- ・ 点在するナンキンハゼを駆除する。

外周自然林ゾーン

- ・ 在来種で構成された樹林を保全・継承する。
- ・ ナンキンハゼ樹林を在来種の樹林に林相転換する。
- ・ 点在するナンキンハゼを駆除する。
- ・ ナギを増殖抑制する。



- 良好な眺望
- - -→ 阻害されている眺望
- - -→ 浅茅ヶ原からの眺望

- | | | | |
|--------|------------|------------|----------|
| ■ スギ | ● クスノキ | ● サクラ類 | ● ナンキンハゼ |
| ● ヒノキ | ● イチイガシ | ■ イロハモミジ | ■ フジ棚 |
| ● クロマツ | ▲ ヒラギ | ● ケヤキ・エノキ | ■ 樹林地 |
| ● ナギ | ● その他常緑広葉樹 | ● イヌシデ・コナラ | |



図：計画方針図

5. 植栽計画

(3) 計画目標

記念樹・天然記念物の計画目標の修正

参道付近のサクラ林

- ・日照条件の良い位置にサクラ類を補植する。
- ・衰退しているサクラ類は、適宜伐採する。

参道沿いスギ林

- ・スギを主とした樹林を保全・継承する。

北東部密生林

- ・クスノキ等の大径木を保存する。
- ・後継種としてイチイガシ等を補植する。

記念樹「飛火野のクスノキ」

- ・既存のクスノキ巨樹（3本）を保全・継承する。

市指定天然記念物春日大社境内イチイガシ巨樹群

- ・既存のイチイガシ巨樹を保全し、後継樹を補植する。

芝地中央の樹木群

- ・過密な樹木群は、今後の生長に配慮して択伐を行う。
- ・十分な余地がある場合には、マツ類の補植を行う。

飛火野の芝地

- ・水路沿いのナンキンハゼは、全て伐採する。
- ・ナンキンハゼの伐採にあたっては、遺構の保存と景観への影響軽減に配慮する。

道路沿い樹林地

- ・ナンキンハゼは、全て伐採し、在来種（アカマツ、イヌシデ等）を補植する。
- ・補植は、浅茅ヶ原からの眺望に配慮する。

尾根のサクラ

- ・ナラノヤエザクラ、ナラノココノエザクラを保全・継承する。
- ・後継樹として、ナラノヤエザクラ、ナラノココノエザクラ、エドヒガンを補植する。

水路沿い樹林地

- ・点在するナンキンハゼを全て伐採する。
- ・立地環境に応じて在来種（ケヤキ、エノキ、イヌシデ、コナラ、イロハモミジ、スギ、イチイガシ）を補植する。

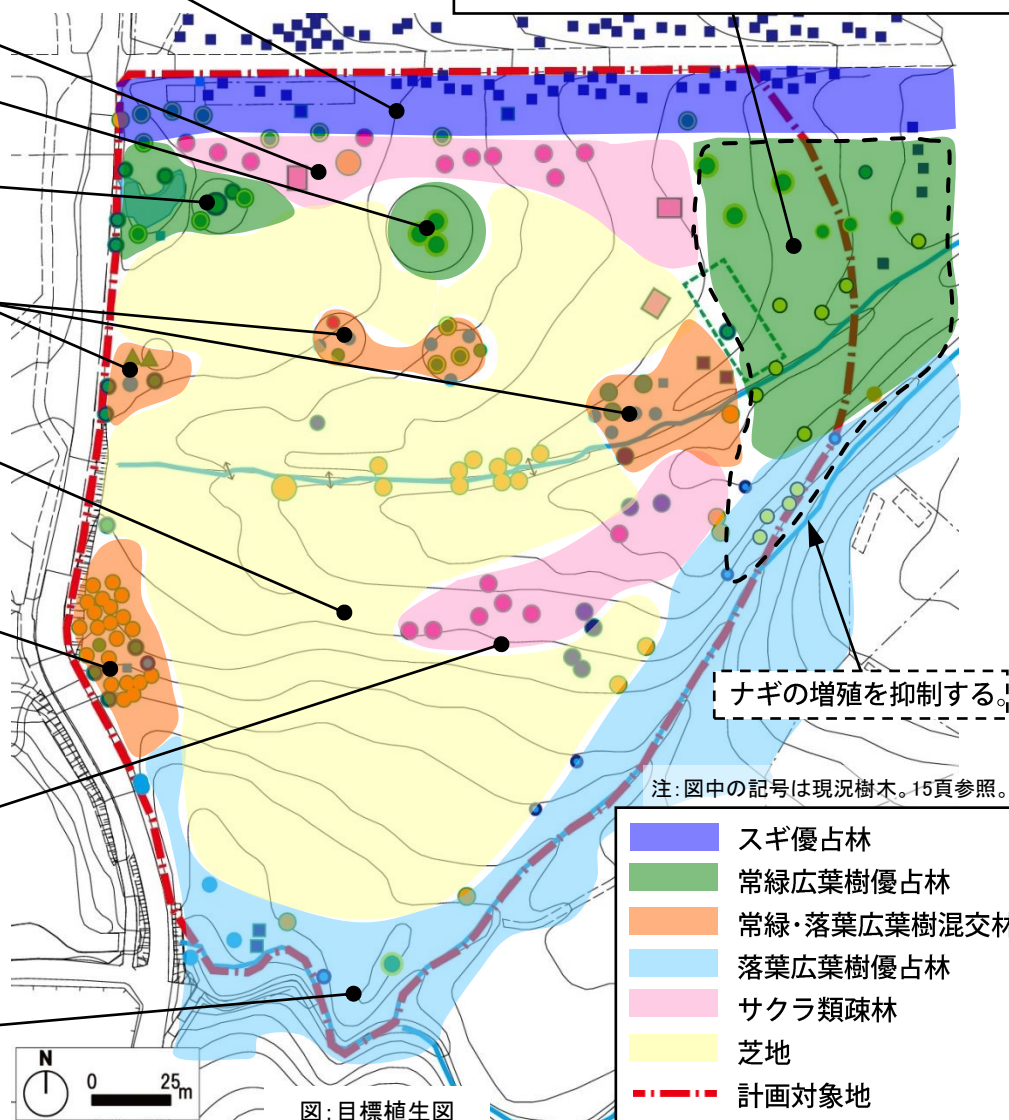


図: 目標植生図

5. 植栽計画

3) 丁寧な情報発信の項を追加

(4) 具体化に向けての検討

1) ナンキンハゼの伐採

①遺構の保存

- ・水路（おさかづきの清流）の遺構を保存するため、ナンキンハゼの伐採時には除根を避け、根系の枯死・腐朽を促すために、切株への薬剤塗布とひこばえ刈り取りを行う。

②景観への影響緩和

- ・ナンキンハゼの伐採による景観への影響を緩和するため、既存ナンキンハゼのうち修景効果の高い大径木のみ暫定的（5～10年程度）に存置する。
- ・ナンキンハゼに代わる修景効果のある高木種を補植する。※1

※1 景観変化への影響緩和のための植栽

春日大社は、飛火野本来の草地景観を保全するため、水路沿いのナンキンハゼを伐採する予定であり、その景観変化の影響緩和のため、水路南側に代替樹木を数本植栽している。（令和2年植栽）。植栽は、山並みへの眺望を阻害しないように本数を限定し、樹高が余り高くないソメイヨシノを選択している。植栽整備後は、景観の経年変化の状況を確認したうえで、長期的な観点から植栽管理を行う予定である。



水路沿いのナンキンハゼと
新規植栽のサクラ類

2) 自然林への在来種の補植

①シカの採餌への対応

- ・自然林への在来種の補植は、シカの採餌を避けるための対策が必要となる。具体的な対策としては、規格の大きな樹木（樹高3m程度）を植栽する方法、ネットなどでシカが立入できないエリアを設定する方法、シカが採餌しないイヌガシやアセビの根元に植え付ける方法等が考えられる。具体化にあたっては、補植する場所に応じて効果的な方法を選択する必要がある。

②立地条件に適した樹種選定

- ・自然林への補植は、樹木が競合するため、立地条件に適した樹種選定がより重要である。計画対象地の地形、土質、水系、既存樹木等の状況等の要因によって、日照条件、水分条件、土砂流動の有無などの立地条件が大きく変化するため、詳細な検討が必要である。
- ・立地条件に適した樹種選定は、計画対象地の樹種別の分布状況を詳細に確認することで、ある程度は判断可能である。

3) 丁寧な情報発信

具体化に向けて重要な点は、丁寧な情報発信によって、「本事業が自然環境や景観の保全を目的としていること」について広く理解を得ることである。

情報発信に際しては、事業にこれまで親しまれてきた樹木の伐採が含まれるため、これまでの多数の調査・研究のデータや論説を根拠資料として、説得力の高い内容とすることが求められる。